

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520555

研究課題名(和文)現代米語に出没する受動 tough 不定詞節の意味的・統語的分析

研究課題名(英文)Semantico-syntactic analysis of passive tough-infinitives in Present-day English

研究代表者

丸田 忠雄 (Maruta, Tadao)

東京理科大学・理学部・教授

研究者番号：10115074

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：規範文法では This book is easy to be read/to read. で前者は非文法的で、後者が正しいとされている。生成文法でも、tough移動という操作から後者のみが定義される。しかし特にアメリカ英語で、前者の passive tough-infinitives (PTI) が許されるようになってきている。不定詞の主語が常に上昇できるわけではなく、必ず不定詞の態が受動態に限られる。本計画では、これは tough 形容詞がもつ語彙的な受動性によると仮定した。その証拠には tough 形容詞以外でも、ready, fit など語彙に受動的意味を含む形容詞には PTI が可能である。

研究成果の概要(英文)：According to prescriptive grammars, tough constructions with passive infinitives such as (1) are supposed to be ungrammatical. Instead, (2) is legitimate: (1) This book is easy to be read; (2) This book is easy to read. In the generative grammar, (1) will also be ruled out as the raising operation (tough-Movement) only target at the object in the infinitive. However, in these days, so-called passive infinitives have been allowed particularly in American English. Note, however, that the subject of the infinitive cannot be always raised to the surface subject position, but it is only allowed when the voice of the infinitive is passive. In my project, I attribute the possibility of passive infinitives to the voice nature of tough adjectives. In fact, those adjectives with lexically passive meaning such as ready or fit can show passive infinitives: (3) The car is ready to be washed.

研究分野：英語学

キーワード：tough adjectives passive infinitive lexical semantics

1. 研究開始当初の背景

Tough 構文は統語的には 1980 年代の GB 理論の下で(1)の分析が提案され以来これが確立した分析となっている。(1)This book_i is easy (for us)_j [CP Op_i [PRO]_j to read ___]_i] 主節主語は基底生成され、従節で演算子移動が適用し、移動及び叙述に伴う co-indexing により主語と object gap との連関が確立される。一方筆者は平成 15-16 年科研費「形容詞項構造からの形容詞主要構文の分析--tough 構文と W 類形容詞構文」で tough 類形容詞の語彙意味論観点からこの構文の統語的実現を分析したが、その際、まれに(2)This book is easy to be read.のような、(1)の分析とは異なる、gap が passive infinitive の主語位置にある tough 構文が存在することに気付いた。このような subject-to-subject の繰り上げ構文の分析は手つかずで、どのように説明されるのか、以来研究の機会を窺ってきた。この異種の tough 構文は近代英語で頻出し 19 世紀末には消失し(1)型にとって代わられたものである (MEGV, 17.44)。しかし Google での Internet 検索、コーパス等で検索すると現代英語でも(2)型が無視できない程流布していることが分かった。文法書の中にも、まれに(2)型の用法が現代英語にも可能であるという記述もある (細江 1966; 中村 1976; 小西 1989)。そこでまず 2011 年予備的な研究を始め、(2)が non-native 話者の誤用ではなく、native 自身によって実際に使用されているものなのかコーパス等を基に調査した。今回 native 話者の中にも(2)型を使用するものがあるという確信をもつことができたので本申請を行うことになった。

2. 研究の目的

英語の tough 構文 i)This book is easy [to read ___].で、主語は不定詞節内の object

gap と関連づけられるとするのが生成文法の確立した分析であるが、特に現代アメリカ英語で、ii)This book is easy [___ to be read].のように、主節主語が、passive tough-infinitives の主語位置と結び付けられるものも散見される。ii)の用法は近代英語で頻出したが 19 世紀末に消失した。本計画は、①passive tough-infinitives が現代アメリカ英語で再び確立した用法になりつつあること、②ii)の形容詞と i)の形容詞は異なる意味をもつこと、③ii)の主語→主語の繰り上げは tough 構文を含めた Adj + passive infinitives 構文全体を視野に入れて説明が可能になること、等を中心に ii)の文法的分析に取り組む。

3. 研究の方法

- (1) 基礎データ収集：Internet、テキストデータ、スポークンデータ、コーパス等から native によるとされる信頼できる passive infinitives のデータを集める。また複数のネイティブ・インフォーマントとの面談を通じ native intuitions を得た。
- (2) 分析：最新の、さらには伝統文法家の学術文献にあたり tough 類の精密意味論を明らかにし分類を確立した。passive infinitives の出役の条件を考究し、主語繰り上げ構文との連関を解明した。
- (3) 研究の展開：国内外の学会・研究会・講演等で積極的に発表し、また研究協力者とも討論を重ねアイデアの精緻化を図った。

4. 研究成果

生成文法における tough 構文研究は 1960 年代後半から長い歴史があるが(2)のような主語繰り上げ tough 構文の本格的研究は、史的研究を除き、現代英語では皆無といってよい。文法は安定的・永続的なものでなく常に変動している。Tough infinitives も、時代の変遷の中での消長の一例と捉えられ、(2)型の現在の出現は過去用法のリバイバ

ルといってよい。その共時的な深層を明らかにしようとする本研究は、対象そのもののオリジナルな分析に加え、歴史的に近代英語の(2)型 tough 構文研究にも新しい視点の提供する等大いなる貢献をもたらした。

また本研究が明らかにした現象は、他の non-tough 類形容詞 (例えば necessary) にも広がりをもつもので、tough 類の精密な下位分類に基づく他の形容詞類との再編統合等、不定詞補部をとる形容詞全体の分類の見直し、さらにはこれまでにない新たな知見がもたらされた。さらには「騙されやすい」等の受動形を基盤にした日本語 tough 構文もいまだ未開拓で、日英比較対照から、両言語に共通する普遍的意味的制限の発見などユニークな成果もえられた。

参考文献

- Anderson, Deborah L. (2005) *The Acquisition of Tough-Movement in English*, Ph.D. dissertation, University of Cambridge.
- Fischer, Olga (1991) *The rise of the passive infinitive in English*, In *Historical English Syntax*, ed. by Dieter Kastovsky, 141-188. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Jespersen, Otto (1909-1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles* (7 vols.), London: George Allen & Unwin.
- 小西 友七 (編) (1989) 『英語基本形容詞・副詞辞典』、東京：研究社。
- 中村 捷 (1976) 『形容詞』(現代の英文法第七巻)、東京：研究社。
- 細江 逸記 (1966) 『精説英文法汎論』、東京：篠崎書林。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

Tadao Maruta (2013) *Diathetic Alternation Exhibited by Evaluative Adjectives*, 査読有、『東京理科大学紀要』45, 113-127. ISSN 0286-7915

[学会発表] (計 4 件)

丸田忠雄 (2013.9.7) 「Short love poems are easy to read は語彙意味論からどう説明されるのか」(招待発表) *Morphology and Lexicon Forum* (於 慶応大学)

丸田忠雄 (2013.9.10) 「評価形容詞について」(招待発表) *Kansai Lexicon Project* (於 大阪大学)

丸田忠雄 (2013.11.11) 「評価形容詞の語彙意味論を巡って」日本英語学会第 31 回大会 (於 福岡大学)

丸田忠雄 (2015.5.7) 「動作主指向副詞の意味論」(招待発表、日本英文学会 87 回大会) 於 立正大学

[図書] (計 1 件)

丸田忠雄、由本陽子、小野尚之他共著 (2015 度中に出版) 『語彙意味論の可能性を探って』(開拓社)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸田 忠雄 (MARUTA, Tadao)

東京理科大学理学部・教授

研究者番号：10115074

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：